

病院と死

- 近代の医療環境の中でいかに死を迎えるか -

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
倉田 真由美

本研究は近代医療環境の中でわれわれはいかに安寧に死を迎えるかについて追及したものである。近年の医療の発展に伴い様々な死を巡る問題が浮上してきた。また病院の普及により死に場所が自宅から病院へと移行し、ほとんどのものが今日、病院で死を迎えるようになった。こういった環境の中で、われわれには一体どのような最期が待ち受けているのだろうか。

1章、2章では近代の医療環境の中で死を迎えた先人の死を辿り、死の本質についてジャンケレビッチの視座に基づき省察した。死はその本質のひとつに、いくら否定してもその定めを変えられない「確実性」備えていた。また非業の最期を迎えるのも、安寧に迎えるのも自らの死の受容状況が決定因となることがわかった。そして最も重要なのは、死を否定することは即ち生をも否定するということである。現代人が陥っている生と死を切り離れた状況、こうした生にのみ執着する在り様は最後の局面で死の導きを失い、死に生を刈り取られてしまうことになる。これらの死の本質を踏まえ、どのように安寧な死を迎えるべきなのか、最後の境界線を越えて逝くのに、何が必要なのか、われわれは熟考しなければならない。

そこで3章では現代人の死観とこころの救いについて概観した。その結果、現代人は死と分断されたことにより、6割にも及ぶものが死について考えたことがなく、自分自身の死観を備えていないことがわかった。そして死に対し向き合うことのないまま、悪戯に死の恐怖を醸成させ、その恐怖の投影で来世を希求する傾向にあった。こうした実状から抜け出すには、まず自らも死する運命であることを自覚し、先人の死に教えを乞い、死と向き合い、個人の死観を熟成しなければならないだろう。どのような死観を持つかで、死は恐怖の存在ともなりうるし、また運命としての位置づけを与えられるようになる。

われわれは死の恐怖に押し潰されるのではなく、死と向き合い死とは何か熟考する中で自らの死観を育まなければならない。死ぬべきものであるわれわれは、いつまでも死から目を背けてばかりではいられない。ある時期に必ず死と向き合い、死について考えなければならない。こういった意味でも死とわれわれを切り離れた近代社会が齎した弊害は大きい。病院の普及と掲げる目的によって、われわれは日常生活から死と対峙する機会を奪われ、生と死を切り離し、死を疎み、生にのみ執着するようになったのだ。

こういった状況を打開する為に、早急に分断され隠蔽されている死をわれわれの手中に取り戻す必要があるだろう。だからこそ今、病院というシステムを見直し、不要な滞在を認めず治療にのみ病院へ行くように療養の場を自宅にシフトすることを提言する。そしてわれわれ個人は今の病院任せの姿勢を悔い改め、自らのそして大切な人の死に対し責任を持たなければならないのではないだろうか。以上がこの研究を通して明らかとなった。